

東京大学史史料室ニュース


第30号 2003・3・31



ヘンリー・ダイアー（『東京大学百年史』口絵より）

目次

工部大学校都検H. ダイアーのホームページ	2
百年史編集の思い出；泉亘氏の訃報に接して	5
受贈図書一覧	7
史料室日誌抄録	8




Henry Dyer (1848-1918)

Early Years


Work in Japan

Return to UK

Remembering HD




Imperial College of Engineering



The teaching methods introduced by Dyer and his colleagues were revolutionary at the time. Courses had a strong practical element and lasted for over six years with all classes being given in English. The first two years consisted of general engineering and were followed by more specialist classes in

- Civil Engineering
- Mechanical Engineering
- Telegraphy
- Architecture
- Practical Chemistry
- Mining
- Metallurgy
- Naval Architecture

ヘンリー・ダイアー



ダイアーのホームページより（本文参照）

工部大学校都検H.ダイアーのホームページ

加藤 詔士

1. ホームページの開設

ヘンリー・ダイアー (Henry Dyer, 1848-1918) といつて、明治のはじめにスコットランドから招かれたお雇い外国人がいる。明治6 (1873) 年から15 (1882) 年まで、工部大学校 (東京大学大学院工学研究科の前身) の都検として、同時にまた土木・機械工学教授として勤務し、日本の工学教育制度の基礎づくりに貢献をした。郷里のグラスゴウに戻ってからも、日本への関心をもち続け、日英間の交流の進展に尽力した。日本研究、日本人留学生の支援、日本政府の帝国財政及工業通信員などをとおして、顕著な実績を残している。日本近代化の恩人の一人といつていいであろう。

そのダイアーをめぐるホームページが開設されている。お雇い外国人としてはめずらしい例と思われる。ダイアーの縁者であるR.ハンター (Robin Hunter) とL.ハート (Lesley Hart) が開設したもので、二人が勤務するグラスゴウのストラスクライド大学から発信されている。二人はダイアーの妹J.ダイアー (Janet Dyer) の曾孫にあたる。

ダイアー・ホームページは、多彩な内容から構成されている。下記のように20項目近くにおよんでおり、これを読むだけで、ダイアーの生涯と人物像をたやすく描くことができる。

- 幼年時代 ○ダイアーの家系 ○山尾庸三 (1837-1917)
- グラスゴウ大学 ○日本への招聘 ○日本への移住 ○ダイアーの家族 ○工部大学校 ○工部大学校を辞職 ○晩年 ○日本から帰国後の教育活動 ○日英交流の推進 ○その他の活動 ○ダイアーの死 ○ダイアー記念事業 ○1996年産業のグローバリゼーションに関するヘンリー・ダイアー・シンポジウム ○1997年工学教育に関するヘンリー・ダイアー・シンポジウム ○ダイアー著作 (一部) 一覧 ○ダイアー関連著述

このホームページが公開されたのは平成11 (1999) 年2月18日であり、これまでに年間約400アクセスを記録しているという。筆者は、開設以来、O.チェックランド (Olive Checkland) 夫人とともに少しばかりお手伝いをしてきたので、いっそうの活用を願って、紹介したいと思う。

2. ヘンリー・ダイアーの生涯：総論

「ヘンリー・ダイアーはスコットランド人エンジニアであり、東京の工部大学校の創立時の校長として、19世紀後半の日本の工業化に大きな役割を果たした。このウェブサイトはダイアーの生涯を記述して、スコットランドにおける幼少のころと受けた教育、日本での活動、その後スコットランドに戻ってからの晩年を描いている。」

ホームページはこのように始まり、まずダイアーの生涯と活動について、総論的にまとめられている。

「ヘンリー・ダイアーの物語は、とくにかれが日本とスコットランドで大変革の時代を体験してきたので、魅力ある物語となっている。かれは実に多数の著述をなした人であつて、日英両国で出会った経済、工業、技術、社会の数々の変化について記録し論評したのであつた。また、強

靱で、しばしば急進的な見解を抱いた人でもあつたので、興味深い人であつたし、ときには論議を呼ぶところがあつた人物であつた。日本社会と英国社会をうまく結びあわせることにおおいに貢献し、両国とも相互に学びあえるところが多いと信じていた。

ヘンリー・ダイアーは、1848年、西部スコットランドにあるボスウェル教区のベルシルに生まれた。幼年時代はベルシルとその近くのショッツ村で過ごした。1865年ごろ家族と一緒にグラスゴウに移り、そこの鑄造所で働き、夜にはアングソン・カレッジに通った。その後、グラスゴウ大学の学生となり、工学の学位を取得した。」

明治5 (1872) 年になると、東京に新設される工部大学校の校長になるよう推薦された。24歳のときである。翌明治6 (1873) 年に着任して約10年後に同校をやめるまで、日本に在住した。離日後はグラスゴウに戻り、「1918年に死去するまで、同市の文化、社会、教育活動に貢献をした。」

近年、ダイアーへの関心が高まり、数々の方法でその業績がたたえられていることが特筆される。平成8 (1996) 年と平成9 (1997) 年には、グラスゴウのストラスクライド大学と東京大学が、それぞれヘンリー・ダイアー記念シンポジウムを開いた。また、これまでダイアーをめぐるおおくの著作がなされたし、かれ自身も大量の出版物を残している。ホームページには、ダイアーの旺盛な著述活動をまとめた著作目録ならびにダイアーに論究した文献一覧も、付録されていて、有益である。

3. グラスゴウにおける教育・社会活動

以上が総論だとすると、各論では、「幼少のころに受けた教育、日本での活動、スコットランドに戻ってからの晩年」について触れられている。以下では、とくに工部大学校の特徴、ならびに帰国後の活動について紹介する。とりわけ、日英交流の推進者としての活動に注目して紹介する。

まず、工部大学校については、「ダイアーと同僚たちが取り入れた教育方法が、当時としては革新的であつたし、19世紀末の日本の急速な近代化は、この『ダイアーズ・カレッジ』(たいていはこの名で知られていた) の活動によるところ大であつた」ことが、注目される。6年間におよぶ同校の「教育課程はととても実的などころがあつた」。最初の2年間は工学全般の学習、ついで土木工学、機械工学、電信学、建築学、応用化学、鉱山学、冶金学、造船学の専門的な課程が続く。3年目・4年目は、学内と現場の両方で学習が進められた。最後の2年間は、すべて現場に出むいて実的な学習が深められたのである。

学習の「評価は、二週間ごとのクラス試験と、2年目と4年目の末の大試験がおこなわれ、絶え間がなかつた」ことも、特筆される。卒業後7年間に政府に奉職すれば、授業料は免除された。実習の大半は、ダイアーが創置した赤羽工作所でおこなわれた。生徒たちは、琵琶湖疎水事業を指導した田辺朔郎のように、政府の大規模事業に参画したものである。

「工部大学校は、ダイアーの校長時代、多数のスコットランド人を含めて優秀なスタッフがいた」。19世紀末に電気工学の発展に貢献したW.E.エアトン (William Edward Ayrton) や、現代地震学の創始者の一人J.ミルン (John Milne) が、その代表例である。

ダイアーは「個人的・家庭的な理由」から工部大学校の校長職を辞して帰国してからは、教育界で大活躍した。「西部スコットランドで、大学およびその他の学校の教育活動に幅広く関与するに至った」。とくにグラスゴウの王立工科大学の終身理事、27年間におよびグラスゴウ学務委員会の委員および委員長としての貢献が甚大であった。加えて、学務委員会内の継続学級委員会理事、西部スコットランド農科大学理事、グラスゴウ美術学校理事、西部スコットランド家政大学理事、女性教育推進ムアヘッド財団会長なども歴任している。

王立工科大学はダイアーの母校でもあっただけに、同校（当時はグラスゴウ・西部スコットランド工科大学、現在のストラスクライド大学）への関与は、工業化学のヤング講座理事に任命されたときに始まり、明治20（1887）年から同大学の終身理事となり、これを大正7（1918）年に死去するまでつとめた。

「この間、かれはこの王立工科大学の教育問題、たとえばサンドイッチ・コースの導入、クラス規模、指導基準などに関心をもった。また、同大学がグラスゴウ大学と以前にもまして密接な関係をむすぶことも求めていた。グラスゴウ大学が王立工科大学の教育課程を妥当と認定するとか、王立工科大学の工学ディプロマをもっていればグラスゴウ大学理学士号取得のうちの最初の2年間を免除するとみなすとかによって、である。」

グラスゴウにおける社会的・宗教的活動への関与もまた、積極的であった。「グラスゴウ市から治安判事に任ぜられたし、組織されたばかりの協同組合運動の活動家の一人であった。しばらくは同運動の刊行物の一つを編集したことがあった。いくつかの協同組合誌にひんばんに寄稿した（しばしば無署名であった）。かれが表明した見解の多くは論争を呼んだが、それはかれが深く抱いていた主義主張とこの運動への信念がよくあらわれていた」。

生涯を通じて、かれはキリスト教のほか、仏教、神道、儒教にまで幅広い宗教的関心をもっていた。キリスト教の種々の集会で話をするよう頼まれもした。「宗教その他への関心の広さは、死後、家族からグラスゴウのミッチェル図書館に贈られた、蔵書を含む約6000点の遺品のなかにははっきりあらわれている」。そのなかには、大量の図書や、日本画の巻軸と掛物、浮世絵などが含まれている。

さらには、「産業界の仲裁人として労資双方から広く尊敬をうけ、西部スコットランド鋼鉄調停委員会の副委員長を25年間つとめた」ことも特筆される。

4. 日英交流の推進

日本との関連については、日本からやってくる数多くのグラスゴウ留学生の世話をしたこと、グラスゴウ大学資格試験の外国語選択科目として日本語が採用されるよう尽力したことが、注目される。そのほか「数多くの点で、グラスゴウの地域社会と日本とを結びきずなどとなって貢献し、まるで非公式の日本大使のようであった」。

しかも、日本文化の伝来者であったことが特筆される。日本から帰るさいに、「選定された大量の日本の刷物や水彩画を含め、幅広く日本工芸品を持ち帰った」のである。それらは、死後、エディンバラ市立図書館に寄贈されている。種々

の楽器も持ち帰ったが、これはグラスゴウ美術館・博物館に寄贈された。

代表作『大日本、東洋の英国 *Dai Nippon, The Britain of the East, A Study in National Evolution*』のなかに明示されているように、かれは、日本のあらゆる事物に対して関心をもち続けていた。「日本最高の技術者たちから、日本の工学に対する貢献により賞を受けるため、日本に戻るばかりになっていたが、明治37（1904）年に日露戦争がはっ発したため、その授与は英国で日本大使によってとりおこなわれた」。

日英交流の推進者としての活動に対して、種々の称号が贈られている。当時としては外国人で最高位であった勲三等旭日中授章、あるいは、東京帝国大学名誉教師などである。数々の科学・技術関係学会の名誉会員にも選ばれている。学会の意義をダイアーはかねてから高唱し、その結成を勧めていた。

近年、ダイアーの生涯と活動を回顧し顕彰する企画が、いくつあられている。第一は、前述のように、平成8（1996）年4月と平成9（1997）年3月に、グラスゴウのストラスクライド大学と東京大学がそれぞれシンポジウムを開いて、工学教育を推進したかれの功績をたたえた。第二に、胸像が二体制作され、ストラスクライド大学と東京大学工学部に一体ずつ寄贈されている。制作者は日本在住のスコットランド人彫刻家K.トムソン（Kate Thomson）で、アイシーエル（ICL）と英国大使館がこれを後援している。第三に、実業之日本社が創業100周年記念事業として、ダイアーの代表作『大日本・東洋の英国』（1904）の翻訳を企画し、平成11（1999）年12月には、待望の訳書が『大日本、技術立国日本の恩人が描いた明治日本の実像』と題して刊行された。

なお、日英交流の一助として、山尾庸三との関連も大きくとりあげられている。山尾は、「工部大輔として工部大学校の設立責任者であった」。一時期、同校の校長でもあった。その山尾とダイアーは「きわめて良好な関係にあったが、これは両者に共通の背景があって強められたにちがいない」。かつて山尾は、グラスゴウのネピア造船所での実習中にアンダソン・カレッジに通ったとき、「ヘンリー・ダイアーと一緒に授業を受けた」という間柄であったのである。

「山尾庸三はスコットランドの有名な歌『蛍の光』を日本に紹介した」という、興味ある一節もみられる。

5. 労働者階級の出身

本ホームページは、ダイアーの縁者によって開設された。それだけに、ダイアーとダイアー家の歴史をめぐり、たんねんな調査の結果が盛りこまれている。なかでも、両親の出自と住処、ダイアーの結婚と死亡にかかわる情報が貴重である。

まず、ダイアーは、嘉永2（1848）年8月16日、スコットランドはボスウェル教区のミュアマドキン（Muirmadkin）の生まれである。グラスゴウの東12キロほどのところにあり、現在は、北ラナークシャのベルシル町になっている。


父のジョン、母マーガレット・モートンはアイルランドの出身であった。ベルシルの町は、1830年代に鉄と石炭が発見されたことから、そのころ、にわか景気に沸き立っており、英国全土やアイルランド、さらにはポーランドやリトアニアからも移民労働者が流入してきていた。ダイアーの父もそう

した一人であった。『1851年国勢調査』には、父は鋳物工場労働者 (foundry laborer)、住所は「ミュアードキン村エディンバラ通32番地」と記されている。ここがH.ダイアーの出生地である。

ダイアー家は、その後、ホリタウン (Holytown) に短期間住んだあと、安政4 (1857) 年ころには、ショッツ (Shotts) に移った。グラスゴウとエディンバラの中ほどにあるベルシルという町の東方15キロの地にあつて、鉄工業の中心地であった。父はこのショッツ鉄工場 (当時は最盛期にあつた) で働いた。ダイアーは当地の学校 (Wilson's Endowed School) を卒業したあと、このショッツ鉄工場の事務所に勤務した。


やがて慶応元 (1865) 年ころ、一家はグラスゴウに転居すると、ダイアーは克蘭ストンヒルのジェムズ・エイトキン鉄工場 (James Eitoken and Company's foundry) で働いた。同工場では、T.ケネディ (T. Kennedy) とA.C.カーク (A. C. Kirk) のもとで徒弟見習いをした。明治元 (1868) 年には、労働者部門でホイットワース奨学生に選ばれた。20歳のときである。

ダイアー・ホームページ (一部)





Henry Dyer (1848-1918)

Early Years Work in Japan Return to UK Remembering HD



Henry Dyer was a Scottish Engineer who played a major part in the industrialisation of Japan in the latter half of the nineteenth century through his capacity as founding Principal of the Imperial College of Engineering in Tokyo. This web site charts Dyer's life describing his early childhood and education in Scotland, his work in Japan and his later life back in Scotland.

Henry Dyer's story is a fascinating one especially as he lived through times of great changes in Japan and Scotland. He was a prodigious writer who recorded and commented on many of the economic, technological and social changes he saw in both countries. He was also a man who held strong, often radical, views which made him an interesting, and at times controversial, character. He did much to bring together the British and Japanese communities, each of whom he believed had much to learn from the other.




Henry Dyer was born in 1848 in Bellshill within the Parish of Bothwell in the West of Scotland. His early years were spent in Bellshill and in the nearby village of Shotts. Around 1865 he and his family moved to Glasgow where he worked in a foundry, and attended Anderson's College in the evenings. Later he became a student at the University of Glasgow, where he obtained a degree in engineering.

In 1872, Henry Dyer was invited to become the first Principal of the newly created Imperial College of Engineering in Tokyo. He went to work in Japan in 1873 where he lived until he retired from his post as Principal of the College, about ten years later. On leaving Japan he returned to Glasgow where he contributed to the cultural, social and educational life of the city until his death in 1918.

In recent years Henry Dyer has been remembered in a number of ways. In 1996 and 1997 the University of Strathclyde and the University of Tokyo held symposia in Glasgow and Tokyo, respectively, to commemorate Henry Dyer. Much has been written about Henry Dyer and he has left behind a large number of publications.

These pages have been created on behalf of the University of Strathclyde by Robin Hunter and Lesley Hart, both of whom are descended from Henry Dyer's sister, Janet Dyer. The considerable assistance of Olive Checkland and Shoji Katoh in providing information for inclusion in these pages is gratefully acknowledged. Acknowledgements are also due to a number of other organisations and individuals for permission to use photographs and other artwork



Any comments on the Henry Dyer web pages please mailto:orbh@cs.strath.ac.uk

徒弟見習い中に、アングソン・カレッジの夜学に学んだ。それからさらにグラスゴウ大学に進学した。一家の住所は、『1871年国勢調査』ではセント・ヴィンセント通り 449番地、『1881年国勢調査』ではダンバートン・ロード128番地となっている。

ダイアーの結婚については、あたらしい調査研究の成果をとり入れて、横浜で式をあげたことを指摘している。ダイアーは明治6 (1873) 年に来日しているが、翌年の5月19日、香港経由の英国蒸汽船ベハー号で横浜にやってきたM.E.A. ファーグソン (Marie Euphemia Aquart Ferguson) 嬢を迎えた。そして、同月23日、横浜にある英国公使館で、駐日英国大使H.S.パークス卿 (Sir Harry Smith Parkes) の出席のもと、英国国教会様式で結婚式をあげたのである。妻マリーと一緒に日本に赴任してきたとか、マリーとの結婚のために一時グラスゴウに戻ったとかいわれていたけれども、実は、いいなずけの来日をまって横浜で挙式したのである。ただし、これは『グラスゴウ・ヘラルド』紙の報道記事にもとづく記述であつて、結婚登録簿までは示されていない。

妻のマリーは、グラスゴウの金細工人ないし宝石職人 (Goldsmith or Master Jeweller) D.ファーグソン (Duncan Ferguson) の長女であつた。ダイアー夫妻は、日本滞在中に四男一女に恵まれたが、長男は生後まもなく死去した。残る4人の子どもたちはいずれも子どもに恵まれず、したがってダイアーの直系の子孫はいない。

6. 図絵入りのホームページ

ダイアーのホームページには、もう一つ、特記すべきことがある。内容が多彩であるうえに、関連の挿絵、写真、デザインが何点も掲載され、楽しいページが続いていることである。いずれもカラーである。

最初のページを示してみると、別掲のように、英語とカタカナでヘンリー・ダイヤーとでてくる。ダイアーの肖像写真、日本とスコットランドの国旗、スコットランドの国花であるあざみ、妻マリーの写真、日本の富士山と扇が図案化されている。つぎの頁には、郷里のミュアードキン村の川岸風景、アングソン・カレッジが出てくる。そのほか、ダイアーの胸像、英国へ留学した「長州五人組」すなわち伊藤博文、山尾庸三、井上勝、井上馨、遠藤護助の集合写真、山尾庸三の正装写真、グラスゴウ大学本部棟、工部大学の校舎配置図、東京・横浜間を走った蒸気機関車、舞踏会、日本の洋式橋梁、日本から帰国後に住んだグラスゴウはハイバラテラスの自宅、グラスゴウの王立工科大学とミッチェル図書館、ネクロポリス基地にあるダイアーの墓碑、グラスゴウ図書館・美術館、ダイアー・シンポジウムの会場となった東京大学の安田講堂、三四郎池などの、写真やデザインが掲載されている。

山尾庸三が「螢の光」の日本への紹介者かどうか、山尾とダイアーは同級生なのか同窓生なのかなど、検討されるべき点もあるように思われるけれども、数々の興味ある史実が紹介され、簡潔で有用、しかも楽しいページが続いている。いっそうの活用を期待したいものである。

なお、ダイアー・ホームページのアドレスはつぎのとおり。
<http://www.cis.strath.ac.uk/external/hd/>

(名古屋大学教育学部)

百年史編集の思い出 泉巨氏の訃報に接して

益田 宗

百年史編集事業に参加したお蔭で、いろいろなことを耳にもし目にもした。その端々を思い出して書いてみたい。都合の悪いものも見てしまったが。

百年記念事業の基金募集の目標額が100億円と公表されると、大学紛争の余波が学内に残留していたこともあって、素知らぬ顔で受け流す人も多かった。目標額になかなか到達しないことから、事業そのものを白い目で見ようとする人もいた。次の話は、初代百年史編集委員長の笠原一男さんから聞いたもの。笠原さんの教養学部での講義は、いつも大教室を学生で溢れさせ、後方の映写室の小窓からも学生が顔を覗かせていたという。学内では当初目標額を6~70億と踏んでいったところ、学外で協力していただく財界人から、今後相次いで起ると予想される各国立大学の記念事業のことを考えると、東大は基準となるので、きりのよい数字にしてほしいとかで、100となったという。いざきまってみると、また問題が起きた。右肩上りの自動車産業では明日にでもというが、右肩下りの鉄鋼関連の産業は、暫く待って景気が上向いてからということらしい。抜け駆けは許さない、老舗は大変ですなあ、笠原さんの話は佳境に入ると留まるところがない。

次は、戦後の混乱期に事務局長を勤めた石井昂さんの話で、少し内容が地味になる。戦後まもなく、東大では占領軍と意志の疎通を計るため、パーティーを開こうということになって、旧備後福山藩主阿部氏の本郷邸を借りた。物資がよろず不足がちのなかを、どこでどう調達したのか、卓上は賑々しかった。GHQ民政局のお歴々も、当時の日本では入手できないような食料品を持参して、宴を盛り上げた。学内には知恵者がいて、ヤンキーはお姫さまに弱いから宮家か華族のお姫さまも招いてはということになる。今では笑い咄にもならないが、お姫さまはバナナの食べ方を御存知なかった。無理からぬこと。遠まきに眺めている教授達を尻目に、ヤンキーは丁寧に皮の剥き方を教えてさしあげていたという。南原総長時代のことである。東大は、敗戦直後のクリスマスに安田講堂を使って東大関係の戦没者の追悼ミサを行っている。今日では考えられないことであろう。

目にしたものでは、東大が、GHQに提出した初の女子学生の成績表の控である。戦後、4名の女子が入学したが、控からは掛け値なしに優秀であることが読みとれる。憲法制定前後にもそうであったように、GHQ内部には日本ではまだ男女同権が早いのではないかとする意見があったようで、この提出要求は、そのことと関係あるらしいという。

他人の学業成績に触れたので、私たち、伊藤隆（文）、寺崎昌男（教）と私のことにも及ばねば謗りを受けかねない。同じ歳の私たちは、1958年本郷キャンパスに進学し、その後、揃って百年史に関係し揃って停年を迎えた。ところが、この58年進学者駒場時代の成績一覧表（控）が、ひょっこり某氏の資料の中から顔を出したのである。勿論、私たちの名前もそこにあったから、手伝ってくれていた院生たちは手を叩いて喜んだことは言うまでもない。しかし、この3人の部分は、前の女子学生の場合と異って、今後貴重な資料として問題に

されることは、まずありえないと思う。でも、何のための控だったのだろうか。

さて百年史は、通史も部局史も、各小委員会で執筆した原稿をタイプにして提出し、これを印刷所に渡すことになっていた。しかし、いかに周到に執筆要項が作られたとしても、それぞれが執筆するのであるから、叙述の仕方が不揃いになってしまうのは無理からぬことである。それをできるだけ目立たぬようにするのが、私の役目となった。20以上の部局相手となると、大仕事となることが予想できた。

執筆要項は、編集委員会で原案が作られ、各部局の委員長をも交えた全体会議で最終決定がなされた。瑣細な部分の確認を終り、要項案から案の文字を消すことになった次の瞬間、法学部が発言を求めた。私は咄嗟に「来たッ！」と思った。教授は、私たち本部の努力に対して丁寧な謝意を述べられたので、少し拍子抜けの感を懐いた。教授はことばを続けた、変らない穏やかな口調で。大学が部局教授会自治の上に成り立ってきたいきさつを語り、ゆえに部局の独自性もお認めいただきたい、と。執筆要項が完全に遵守されねばならぬなどとは、誰も思わぬところ。異論のあろう筈はない。議事は次の案件に移っていった。

これよりさき、私のところに法学部小委員会のメンバーのひとりから、うちは叙述形式ではなく年表形式を採用しようだが、と個人的に情報が寄せられていた。彼としては、間際になってダメといわれても混乱するので、お耳に入れるという。「来たッ！」と反応したのは、そのためである。叙述するとなると、どうしても評価が入るので、事項を年表風に序列する、手短かにいえばこういうことですね、私は席上、そうは言いだしそびれた。私の属している史料編纂所でも、かつてそれに似たもの（『史料綜覧』）を公にしていたし、議論の詳細は分かれぬまでも、法学部はそれなりの議論は尽してきたであろう。「殿、ご乱心を！」と遮る気持になれなかった。ただでさえ、進捗状況は遅れに遅れていた。議論を振り出しに戻すような愚だけは避けたかったこともある。

後日のことである。刊行物を披いた理系の部局の某小委員長から、恨みがましく云われた。あなたは、あの時、法学部がああすることに既に諒解を与えていたのではないですか、と。彼は私を糺弾するつもりなど毛頭なく、ただ、事項を序列しただけの年表形式でよいなら、うちの部局もそうしたらろうし、そのほうが楽だったのに、そういう気持がありありと彼の顔から窺われた。その場をどう切り抜けたかは覚えていないが、その後も、この体裁上の不揃いに対する不満は、二つ三つに留まらなかったように思う。特に理系の部局の会合にはオブザーバーとして出席したこともある私にしてみれば、今日研究者としては常識に近い業績をどう叙述すべきか、それは科学史研究の分野ではないのか、叙述するとしても、そこに軽重が出てしまっっては先学に対する失礼ではないか、こういう疑問に幾度も接していた。「まァまァ、そう仰有らずに」。なんとか執筆に向わせようとする小委員長の執り成しも他人ごとではなかったのだ。

さて、各部局からタイプ稿が陸續と届けられることになったが、ホッとする間があればこそ、次の難問が控えていた。ほとんどの部局が、割当ページをオーバーしていた、それもはるかにである。割当ページは、各部局の歴史の長さを基礎にして算出したものだが、土壇場になって一冊のページを大

巾に増やすわけにはいかないのだ。一冊の本は、ある程度のページを超えると、製本代が高騰する。もう一卷、巻数を増やすには、全体の予算枠から問題を生じる。そこで、非難を覚悟で、私の一存で叙述の内容に軽重をつけ、軽く感じられた部分は、本文より小さい活字で行間を詰めて組んでもらうことにした。こんな小手先細工で減るページ数は高が知れている。辞を低うして、タイプ稿からそれなりに記述をカットしてもらおう、部局にお願いしようとしても、既に委員会を解散してしまったところもあった。案の定、私のとった措置で、部局では関係者が吊し上げられることになったらしい。これも後日の話である。

いいですよ。先生が細工して縮めてくださったのでいきましよう。あとは、なんとかなりますよ。

それまでは、困った困った一辺倒だった東大出版会の泉亘さんが、一転、断を下した。電話で関係筋の同意をえた風でもなかった。

もうあと100年間、こんなことはないでしょうから。なんとかなりますよ。

しばらくして、本組みのゲラが私の手許に送られてきた。赤字を入れて返却すれば、一段落する筈であったが、泉さんが今度は本当に困ったという顔をして私の前に現れ、すまなさそうに云うのだった。前の行から2、3字食み出して改行している箇所は、意味が変らないように文字を削って1行減にし前に詰めてください。章の末尾が奇数ページで、しかも1、2行だけだったら、これも前のほうを調節して1ページ減としてください。こんなことをしたって、たいして減るも

んじゃありませんがね、と。(新しい章からは、改丁するきまりであった。)

指示に従ったつもりだが、今みると必ずしもそうっていない箇所も多い。私は世に、見せ金とかスタンドプレーとかいうことばのあることを知っている。あれは、泉さんが関係筋に、先生はここまで努力しているんだということを示して理解をえたいばかりに私にやらせた“見せアカ”だったように思えてならない。こんなことをしても、何十ページも減るものでないことは、ベテランの泉さんなら、よく知っていた筈である。

このような作業の繰り返して、1年半ばかりの間に部局史のゲラは次々に私の手許を離れていった。その後、泉さんとは、私のいた史料編纂所が東大出版会を通して史料集を毎年発行している関係で、廊下で時々擦れ違ふことがあったが、長いことばは交わさなかった。やがて私も停年で大学を去ったが、去年の末、遅れ馳せながら泉さんの訃報を耳にした。享年68歳。泉さんは、大阪市住吉区に生れ、市立今宮高校、日本大学を卒業、1961年東大出版会に入社。私たち百年史編集室関係者は、出版に通じているような顔をしているが、その実、何も知っちゃいない。その私たちを、泉さんは陰になり日向になって支えてくれていた。晩年は、東大出版会出資のもとでUTP制作センターを設立して活躍されていた最中であつた。百年史編集の思い出を求められたからには、是非とも書き添えねばならない人物の名である。

(元・百年史編集副委員長)



百年史編集の頃の泉亘氏 (泉圭氏写真提供)

受贈図書一覧（平成14年3月～平成15年2月）

立命館平和研究－立命館大学国際平和ミュージアム紀要－第3号	立命館大学国際平和ミュージアム	平成14年3月	北海道立文書館	平成14年3月
書陵部紀要 第53号	宮内庁書陵部	平成14年3月	北海道立文書館史料集 第十七 北海道立文書館	平成14年3月
燃えつまみれつ 映画監督 今井正物語	高部鑑也	平成14年5月	桃山学院年史紀要 第二十一号 桃山学院	平成14年3月
近代日本における知識人と宗教－姉崎正治の軌跡－	磯前順一・深澤英隆	平成14年3月	大学とはなにか 九州大学に学ぶ人々へ 新谷恭明・折田悦郎	平成14年3月
収蔵文書目録第十五集	千葉県文書館	平成14年3月	名古屋大学史紀要 第10号 名古屋大学大学史資料室	平成14年3月
沼津市明治史料館史料目録29-30 久連区有文書目録	沼津市明治史料館	平成14年3月	豊田講堂と古川図書館－名古屋大学の寄附建物－ 名古屋大学大学史資料室	平成13年12月
低年次教育における九州大学史カリキュラム開発に関する研究	新谷恭明・折田悦郎	平成13年3月	名古屋大学最初の外国人教師－ヨンハンス先生とローレッツ先生－ 名古屋大学大学史資料室	平成14年3月
『低年次教育における九州大学史カリキュラム開発に関する研究』講義録	新谷恭明・折田悦郎	平成13年8月	名古屋大学大学史資料室 保存資料目録 第2集 名古屋大学大学史資料室	平成14年3月
九州大学大学史料叢書 第9-10輯	九州大学大学史料室	平成14年3月	サティア《あるがまま》 第46号 東洋大学井上円了記念学術センター	平成14年4月
向陵 第四十四巻一号	一高同窓会	平成14年4月	広島大学史紀要 第4号 広島大学五十年史編集室	平成14年3月
立命館百年史紀要 第十号	立命館百年史編纂室	平成14年3月	武蔵野美術大学 大学史史料集 第三集 『同盟休校事件』 武蔵野美術大学	平成14年3月
神奈川大学史資料集 第十八集	学校法人神奈川大学	平成14年3月	未来を夢みてここに集う－日本女子大学創立100周年記念特別展示・記録集－ 日本女子大学成瀬記念館	平成14年3月
歴史編纂事務室報告 第二十三集	明治大学歴史編纂事務室	平成14年3月	森泉家文書目録 収蔵文書目録第41集 埼玉県立文書館	平成14年3月
渋沢研究第14号	渋沢研究会	平成13年10月	文書館紀要 第15号 埼玉県立文書館	平成14年3月
満川亀太郎－地域・地球事情の啓蒙者（上）	拓殖大学創立百年史編纂室	平成13年9月	神戸大学百年史 写真集 神戸大学百年史編集委員会	平成14年3月
平成14年明治古典会七夕古書大入札会目録	明治古典会	平成14年6月	北海道立文書館所蔵公文書件名目録17 北海道立文書館	平成14年2月
神奈川大学を築いた人々	学校法人神奈川大学	平成13年3月	北海道立文書館所蔵資料目録17 北海道立文書館	平成14年3月
武蔵学園史年報 第7号	武蔵学園記念室	平成13年12月	拓殖大学百年史研究 9号 拓殖大学創立百年史編纂室	平成14年3月
比較文化論叢8	札幌大学文化学部	平成13年9月	生誕一五〇周年記念 図録 小野梓－立憲政治の先駆・大学創立の功労者－ 早稲田大学	平成14年3月
年史資料の収集・保存－1999年度全国研究会分科会報告 於・金沢大学－	全国大学史資料協議会	平成13年3月	日本大学百年史 第三巻 日本大学百年史編纂委員会	平成14年3月
知覚特別特攻隊	村永薫	平成12年8月	中央大学史資料集 第十九集 中央大学入試・広報センター事務部大学史編纂課	平成14年3月
銀輪	林 宥一	平成12年9月	拓殖大学百年史研究 別冊－拓殖大学百年史編纂 拾遺 I－ 拓殖大学創立百年史編纂室	平成14年6月
満川亀太郎－地域・地球事情の啓蒙者（下）	拓殖大学創立百年史編纂室	平成13年9月	大阪市立大学 恒藤記念室所蔵資料目録 大阪市立大学学術情報総合センター	平成14年3月
大学という病 東大紛擾と教授群像	竹内洋	平成13年9月	東京外国語大学史 資料編 一－三 東京外国語大学	平成14年3～7月
戦争の青春－書き残された昭和精神史－	ゆりはじめ	昭和63年8月	拓殖大学百年史 部局史編 拓殖大学創立百年史編纂専門委員会	平成14年3月
長興又郎日記－上－	小高健	平成13年3月	神戸大学百年史 通史 I 前身校史 神戸大学百年史編集委員会	平成14年3月
サティア《あるがまま》 43号	東洋大学井上円了記念学術センター	平成13年7月	宮城学院資料室年報 第8号 学校法人 宮城学院資料室	平成14年3月
お茶の水女子大学 大学資料目録 1	お茶の水女子大学	平成13年3月	学術月報 Vol.55 NO.6 日本学術振興会	平成14年6月
大阪市立大学 学生寮の歴史	大阪市立大学	平成13年3月	皇學館百二十年周年記念誌－群像と回顧－ 展望－ 学校法人 皇學館	平成14年4月
中央大学百年史 通史編 上巻	中央大学百年史編纂委員会専門委員会	平成13年3月	早稲田大学 校資名鑑－早稲田を支えた人々－ 早稲田大学校資名鑑編集委員会	平成14年7月
神奈川大学短期大学の50年	学校法人神奈川大学	平成13年3月	日本史料叢書〔I〕佐久間権蔵日記第四集（大正四年） 横浜開港資料館	平成14年3月
絵葉書にみる沼津の名所	沼津市明治史料館	平成13年12月	横浜開港資料館紀要 第二〇号 横浜開港資料館	平成14年3月
獨協学園史 1881-2000	獨協学園百年史編纂委員会	平成12年5月	研究叢書 第3号 全国大学史資料協議会	平成14年6月
獨協学園史 資料集成	獨協学園百年史編纂委員会	平成12年5月	創価教育研究 創刊号 創価大学創価教育研究センター	平成14年3月
近代日本研究 第18巻	慶應義塾大学深澤研究センター	平成14年3月	名古屋大学博物館報告 第17号 名古屋大学博物館	平成14年3月
富田正文氏旧蔵書籍目録（通称 富田文庫）	慶應義塾大学深澤研究センター	平成14年3月	中央大学史紀要 第12号 中央大学入試・広報センター事務部大学史編纂課	平成14年8月
高等教育研究叢書 69-70	広島大学高等教育研究開発センター	平成14年3月	サティア《あるがまま》第47号 東洋大学井上円了記念学術センター	平成14年8月
大学論集 第32集	広島大学高等教育研究開発センター	平成14年3月	拓殖大学百年史研究 10号 拓殖大学創立百年史編纂室	平成14年7月
野間教育研究所紀要 第44集	財団法人野間教育研究所	平成14年3月	広島大学所蔵 森戸辰男関係文書目録 上下巻 広島大学 森戸文書研究会	平成14年9月
関西学院史 紀要 第八号	学校法人関西学院	平成14年3月	早稲田大学史紀要 第三十四巻 早稲田大学史資料センター	平成14年9月
北海道立文書館 研究紀要 第17号			向陵 第44巻2号 一高同窓会	平成14年10月

横浜商工会議所の100年 1880年～1980年 横浜商工会議所	昭和55年4月	弥生道 一校卒業50周年記念文集 一校同窓会・資料委員会	平成2年4月
比較文化論叢 札幌大学文化学部 10 札幌大学文化学部	平成14年9月	向陵 一校百年記念 一校同窓会・資料委員会	昭和49年10月
歴史編纂事務室報告 第二十三集 創立120周年と明治大学史展 谷本宗生	平成14年3月	風荒ぶ曠野の中に 一校一八会 一校同窓会・資料委員会	平成7年9月
立命館百年史紀要 第十号 谷本宗生	平成14年3月	向陵 一校百二十五年記念 一校同窓会・資料委員会	平成11年10月
旧制福岡高等学校創立八十周年記念文集『人生旅路遠けれど』 旧制福岡高等学校同窓会	平成14年10月	サティア《あるがまま》第49号 東洋大学井上門了記念学術センター	平成15年1月
サティア《あるがまま》第48号 東洋大学井上門了記念学術センター	平成14年10月	財団法人野間教育研究所蔵 学校沿革史誌目録 国・公立高等教育機関編 財団法人野間教育研究所	平成14年10月
佛敎大学の歩み—1992～2002 佛敎大学	平成14年10月	野間教育研究所 戦時下教育資料3 松崎実次関係文書目録 財団法人野間教育研究所	平成14年11月
金沢大学50年史 通史編 金沢大学	平成13年8月	拓殖大学百年史研究 11号 拓殖大学創立百年史編纂室	平成14年12月
開館30年 憲政記念館所蔵史料目録 衆議院憲政記念館	平成14年11月	「校歌」の史譜 明治大学史料委員会	平成14年12月
戦後教育史研究 第16号 明星大学	平成14年11月	第一高等学校卒業半世紀記念文集 新壘 一校同窓会・資料委員会	平成4年4月
学院史料 vol.18 神戸女学院史料室	平成14年10月	山尾庸三傳—明治の工業立国の父— 兼清正徳	平成15年1月
富山大学五十年史 上下巻 富山大学	平成14年10月	舞鶴市明倫国民学校梅田学級児童画集 立命館国際平和ミュージアム	平成14年11月
奈良先端科学技術大学院大学創立10周年記念誌「温故知新」 奈良先端科学技術大学院大学	平成14年3月	東京大学生産技術研究所(旧歩兵第三聯隊兵舎)建造物記録保存調査 1-5 文化庁	平成14年3月
あ、戦没学徒 廣瀬勘一郎	平成14年10月	集成 学徒勤労働員 目次 福岡敏矩	平成14年12月
企画展「地図が語る沼津の歩み」図録 沼津市明治史料館	平成14年12月	学習院大学計算機センター年報 Vol.23 2002 学習院大学計算機センター	平成14年12月
佛敎大学報 第52号 佛敎大学	平成14年10月	成瀬記念館2001・2002 No.17 日本女子大学創立100周年記念号 日本女子大学成瀬記念館	平成14年12月
高等教育研究叢書 71 広島大学高等教育研究開発センター	平成14年11月		

史料室日誌抄録（平成14年11月～平成15年2月）

11月6日（水）	室員打ち合わせ
11月8日（金）	第55回東京大学史料の保存に関する委員会
11月20日（水）	室員打ち合わせ
11月22日（金）	室員「第4回図書館総合展」へ研修
11月27日（水）	室員打ち合わせ
12月11日（水）	兵庫県出石町教育委員会から「加藤弘之郷がえり展」貸出資料返却
1月30日（木）	東京大学史史料室ニュース第30号原稿依頼状送付 経理部管財課から『東京大学生産技術研究所建造物記録保存調査』 （文化庁発行）を受入
2月14日（金）	東京大学史史料室ニュース第29号発送終了

この間の閲覧者数

学内者	10名
学外者	4名

主な学外閲覧者所属機関

(株) グンヤプロ、跡見学園女子大学、衆議院憲政記念館、(財) 武生郷友会、東北大学工学研究科、東京学芸大学

文献撮影・複写許可件数	5件
調査(照会)件数	27件

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第30号

発行日：2003年3月31日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03(5841)2077(直)

印刷所：株式会社 芳文社

Archives Section of the University of Tokyo

東京都町田市1-18-18